

繁殖に問題を抱える牛に 新ETシステムを活用した 受胎率改善への取り組み

DATA 事業規模
所在地：九州地区
飼養頭数：ホルスタイン種経産牛86頭
黒毛和種経産牛130頭

酪農経営にとって繁殖成績の改善は大きなメリットであるため、全農ET研究所ではさまざまな取り組みを行っている。今回は「新ETシステム」を取り入れて、成績改善に取り組む3農場の事例を紹介する。

「新ETシステム」とは

発情が来ない「長期不受胎牛」や、3回以上人工授精を行っても受胎しない「リピートブリーダー牛」といった問題を抱えた経産牛が年々増加している。こうした牛の割合が増える、分娩間隔が長くなり、結果として農場の出荷乳量が落ちてしまう。

全農ET研究所ではこの問題を改善するため、「新ETシステム（図1）」を開発した。これは、①受卵牛の管理②発情周期の同期化③受胎率の高い新鮮卵の利用などを実施するシステムである。新ETシステムによ

る受胎率は平成23年度の全国計で66・0%と高い成績を残している。

新ETシステムによる成績改善

1番目の農場では、繁殖問題に起因する牛の淘汰が課題となっていた。特に暑熱ストレスが強い7〜8月の授精は、成果が上がらないことから実施していなかった。しかし長期不受胎牛に対して新ETシステムを実施したところ、受胎する牛が出てきた。これを受けて、1〜2回目の種付けは人工授精、それ以降は新ETシステムを採用した。

次の農場も繁殖成績が課題となっ

て、成績が伸び悩んでいた。初産や2産の牛の多くが繁殖障害により淘汰されており、受胎率の向上が急務であった。システム導入後、受胎率は改善した。現在では完全に新ETシステムに移行し、更なる成績改善に努めている。

最後に紹介する農場は、周産期疾病や蹄病に悩まされる傾向が強かった。1頭1頭を大事にする経営方針から、産次数の長い牛が多く、長期不受胎牛も見られた。そのため繁殖検査を兼ねて新ETシステムを実施し、成績改善に努めている。

この3農場を含む地域の新ETシステムの受胎率は、長期不受胎牛を含めても64%と高い水準を示している。3つの農場が目指す「長命連産」の達成に新ETシステムは有効な手

段である。より安定的な経営を目指すうえでは、産次数を伸ばし、育成牛・導入牛の頭数を減らすことが必須と考えている。

最後に

新ETシステムの魅力は、高い技術力を持った技術者が、生産者に「ここまでやるのか」と言われるほど徹底して、受卵牛の管理・状態の把握を行い、そのことにより高い受胎率を得られることにある。新ETシステムの改善に一手間をかけることで、①分娩間隔が短くなるうえ、農場の搾乳日数が短くなり、結果として出荷乳量が増える、②産次数が伸び、導入にかかるコストを抑えられるなど、経営は大きく改善する。

新ETシステムの取り組み

図1：作業の流れ



0日：(全農 ET 研究所)
子宮及び膣内の検査
採血、簡易的栄養診断など
発情同期化処置

17日：(全農 ET 研究所)
卵巣の超音波診断

18日：(地元技術者・全農ET
研究所)受精卵移植



Point!

母牛の健康状態を保つため、農場内を清潔にし、牛がゆったりと休めるように整えている



写真1：妊娠鑑定を実施している様子



写真2：紹介した1農場の様子

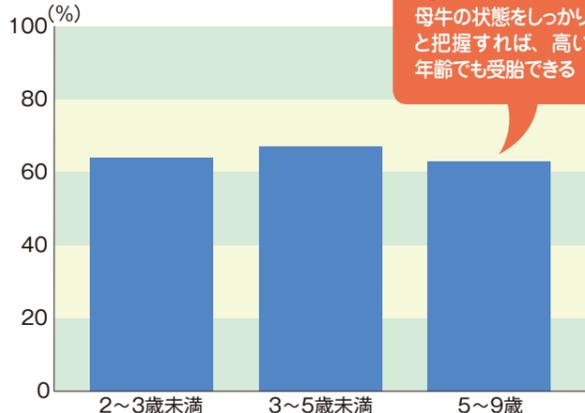
図2：新ETシステムの受胎率推移



Point!

夏場でも安定して高い受胎率を示している

図3：ホルスタイン種経産牛の年齢別の受胎率



Point!

母牛の状態をしっかりと把握すれば、高い年齢でも受胎できる